

# 変化するメディアとことばの現在

企画責任者：片岡邦好（愛知大学）  
話題提供者：堀内ふみ野（日本女子大学）  
辻大介（大阪大学）  
野澤俊介（北海道大学）  
細馬宏通（早稲田大学）  
山崎晶子（東京工科大学）  
指定討論者：橋元良明（東京女子大学）

## 1. はじめに

本シンポジウムでは、メディア研究、会話研究、マルチモーダル研究、文法研究といった各分野の研究者が、近年のメディアがもたらした社会、コミュニケーション、言語の変化を具体的な研究事例から提示し、各々の知見が関連分野にどのような示唆をもたらすかを議論する。例えば、コロナ禍でオンライン・コミュニケーションが急速に拡大したことで、新たなメディアの利用機会と形態が生まれたり、「打ちことば」の発達に伴う語彙・文法体系の変化などが観察されている。教育・研究機関においても、数年前には広く浸透していなかった教材提示や評価方法の方法が、いまや当たり前の技能として想定されている。こういったメディアの変化に伴う社会、コミュニケーション、言語的な変化は相互に関連して進むと考えられるが、異なる研究領域を接続する試みは現在でも限定的であり、各領域で蓄積された知見を共有する機会を持つことが、今後のメディアとことば研究の進展には不可欠であろう。

よって本企画は、2023年時点での最新のメディアの様相とその影響を多角的な観点から捉えるスナップショットとしての意義を持つのみならず、急速な社会の変化を背景に、新たな研究課題の設定や分析枠組みのあり方を創出する貴重な機会を提供する。とはいえ、「メディア」が包含する領域は広範かつ多岐にわたり、本学会がカバーする領域をはるかに凌駕する(Pavlik and McIntosh 2017)。そこで本企画では、既存のメディア談話研究（例えば、JASS 第25回大会シンポジウム、「メディアとことば」研究会による一連の刊行物）に加え、学会以外からの知見を積極的に取り込むことで、新たな視点とテーマを刺激する機会となることを期すものである。広義のメディアリテラシーは、話しことばや書きことばのみならず、視覚や聴覚から触覚、味覚、嗅覚とのインターフェイスへとその適用範囲を広げつつあり、本学会が標榜する「学際性」が顕著に求められる対象でもある。本学会のこのDNAを継承する意味で、本シンポジウムでは学会内外の多彩な研究分野から登壇者を迎えている。

まず堀内（以下、敬称略）は、言語学・談話文法の観点から「打ちことば」の諸特徴とその変化に着目しながら、「打ちことば」が一般的な文法研究に与える示唆、今後の研究土壌としての可能性を検討する。続く辻は、近年のネットユーザの分断に着目しつつ、イデオロギーベースの極性化に加え、情動ベースの極性化が進行しつつあることを指摘し、全国規模の調査・サーベイ実験の結果を検証する。また野澤は、言語人類学的な観点からASMRと呼ばれる共感的な動画コンテンツやストーリーミング文化を考察し、昨今の高度にネットワーク化された世界における交感のイデオロギーを探る。細馬は、相互行為分析の観点からZoomなどにおける遠隔コミュニケーション時の遅延（レイテンシ）に着目し、しばしば対面会話とは異なる不自然なターン交替の間やオーバーラップが生まれる原因を究明する。最後に山崎は、遠隔通信技術の発達に伴う遠隔コミュニケーションに着目し、映像だけではなく特に音声の出力位置と相互行為の問題を、作動者の身体配置という観点から論ずる。いずれの講演も、各分野の先端に位置する画期的な知見を提供するものであり、今後のメディア研究の方向性を占う貴重な契機となろう。

## 参考文献

Pavlik, John, and Shawn McIntosh. (2017) *Converging Media: A New Introduction to Mass Communication*. New York: Oxford University Press.

# 「打ちことば」が拓く文法研究の地平

堀内ふみ野（日本女子大学）

## 1. はじめに

急速な通信技術の発展とコミュニケーションのオンライン化を背景に、インターネットを介してキーボードなどを「打つ」ことで視覚化された「打ちことば」（田中, 2014）の使用が拡大し、現代の言語使用の大きな割合を占めている。日本語学の分野では携帯メールやLINEにおける絵文字やスタンプ等の研究（e.g. 三宅, 2005; 岡本・服部, 2017; 加納ら, 2017）、英語圏でもCMC（Computer-Mediated Communication）についての研究が重ねられているが、「打ちことば」の特殊な表記に注目が集まる一方、他のモードにも見られる一般的な言語的要素の使用実態の分析はあまり進んでいないとの指摘もある（落合 2021）。本発表では、「打ちことば」の文法的な側面に着目した発表者による事例研究を示しながら、「打ちことば」がより一般的な文法研究にもたらす示唆や、「打ちことば」が拓く今後の言語研究の可能性を検討する。

## 2. 「打ちことば」を対象とした文法研究の事例

「打ちことば」は、伝統的な書きことばに比べ、創造的な言語使用が許容されやすい。同時に、話しことばとも異なり、やりとりが可視化され、広く共有され、文字情報として保存される。このため、使用の積み重ねの中から創造的な表現が創発・伝播しやすく（Cf. McCulloch, 2019）、研究者にとっても進行中の文法変化を観察しやすい環境である。本発表では、「打ちことば」に見られる創造的な言語使用の一例として、逸脱的な読点の使用に着目した事例研究を示す。具体的には、「言いづら  
いん、だけどね」「ずっと好き、なジャンル」のように、書きことばの規範とも話しことばでの息継ぎとも異なる位置に読点が入る事例を取り上げ、用法の特性、創発・伝播の背景、そこに反映された文法感覚の変化を用法基盤（usage-based）のアプローチで分析する。事例をもとに、構文構成要素の拡張と、文法の文脈依存性について検討する。

## 3. 「打ちことば」の観察から見えてくる今後の文法研究の可能性

「打ちことば」のデータ収集や分析は既存のシステムでは困難な面もあるが、その困難さの要因を辿ると、従来の言語観の背景にある暗黙の想定が見えてくる。たとえば、記号的・視覚的要素は既存のコーパスや文字ベースの検索システムではうまく抽出できない場合が多く、読点一つとっても、検索時にその有無を厳密に指定できないことがある（「思うん、だ」と検索しても読点のない「思うんだ」の事例が併せて抽出される、カンマと読点が区別されない等）。この背景には、読点の有無や「カンマか読点か」は言語表現の意味・機能の違いに大きくは貢献しないという想定が見てとれるが、「打ちことば」ではこうした記号も構文を構成する主要な要素（意味・機能の違いを生み出す形式の一部）となり、文法の組織化や変化に関わっている可能性がある。「打ちことば」の観察は、何が言語表現の構成要素とみなせるかの再考を促し、既存の文法研究の scope を広げ、言語表現の分析に新たな展開をもたらさうだろう。

### 参考文献

- 加納なおみ・佐々木泰子・楊虹・船戸はるな（2017）。「打ち言葉」における句点の役割—日本人の大学生のLINEメッセージを巡る一考察—. お茶の水女子大学人文科学研究, 13, 27-40.
- McCulloch, Gretchen (2019). *Because internet: Understanding the new rules of language*. London: Random House.
- 三宅和子（2005）. 携帯メールの話しことばと書きことば—電子メディア時代のヴィジュアルコミュニケーション—. 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰（編）メディアとことば 2, 234-261. ひつじ書房.
- 岡本能里子・服部圭子（2017）. LINEのビジュアルコミュニケーション—スタンプ機能に注目した相互行為分析を中心に—. 柳町智治・岡田みさを（編）インタラクションと学習, 129-148. ひつじ書房.
- 落合 載人（2021）. 「打ちことば」の基盤的研究. 筑波大学大学院博士論文.
- 田中ゆかり（2014）. ヴァーチャル方言の3用法—「打ちことば」を例として—. 石黒圭・橋本行洋（編）話し言葉と書き言葉の接点, 37-55. ひつじ書房.

# 感情・情動の媒体としてのインターネット

辻大介（大阪大学）

インターネットは、その黎明期には、万人に平等で自由な情報発信と議論の場を開き、より民主主義的な市民社会の形成基盤となることを期待されていた。しかし近年はむしろ、ターゲットへの嫌悪を煽る誹謗中傷の殺到（いわゆる「炎上」現象）や、マイノリティを排斥するヘイトスピーチの瀰漫、党派的对立感情を露わにした罵倒の応酬など、暗い面のほうがクローズアップされがちだろう。佐藤卓己（2008）の用語法を借りていえば、理性的な「輿論（public opinion）」の場から情緒的な「世論（popular sentiment）」の場へ、とでも表せそうなインターネット像の変化である。

社会科学的なインターネット研究においてもまた、感情（emotion）や情動（affection）に注目する向きが、近年少しずつ目につくようになってきた。

アメリカでは周知のとおり、市民レベルでも共和党支持派（保守）と民主党支持派（リベラル）の政治的「分断」が深刻化している。そして、その一因がネット利用にあるのではないかと、とも目されている。ネットでは自分の政治指向にあった情報の選択的接触が容易になる。また、Facebook等のSNSでも政治指向の似た相手とつながり、保守派同士／リベラル派同士でそれぞれに閉ざされた「エコーチェンバー」が形成される。それによって、元々の政治指向がより極端になっていく。これをイデオロギーベースの極性化（ideology-based polarization）といい、これまでの研究も主流はそこに照準するものだった。

それに対して、イデオロギーや政治指向と関わりつつも、また別の形での市民間の「分断」も進んでいることが、いくつかの調査研究から明らかにされている。たとえば、対立党派の者（共和党支持者にとっての民主党支持者、あるいはその逆）とは交友したくない、家族を結婚させたくないといった傾向が、近年ほど強まっているのである。こうした情動ベースの極性化（affection-based polarization）とネット利用の関連を示唆する実証研究も、少ないながら現れている。

さて、日本の場合はどうなのか。ネット利用はユーザの意識・態度の極性化をうながし、市民間の「分断」を昂進させるように作用しているのだろうか。それはイデオロギーベースの作用か、情動ベースの作用なのか。本報告ではこの問いを中心に据えて、2019年に行った全国規模の無作為抽出調査のデータ分析の結果をまず紹介する。主だった知見はすでに公開済みのため（辻編 2021）、未公開の分析結果や、その後の調査・サーベイ実験の結果も、あわせて報告することにしたい。それをとおして、インターネットを感情・情動の媒体（media）という視角からとらえることの重要性を示す。

## 参考文献

佐藤卓己（2008）. 輿論と世論—日本的民意の系譜学. 新潮社.

辻大介（編）（2021）. ネット社会と民主主義—「分断」問題を調査データから検証する. 有斐閣.

# 導体と快樂

## —交感性の記号イデオロギー—

野澤俊介 (北海道大学)

### 1. はじめに

「ソーシャルディスタンス」や「濃厚接触」「テレワーク」などの言葉は、コロナ禍を指標する言説としてウイルスのように拡散し、コミュニケーションにおける接触や距離についての議論を様々な形で深化させてきた。本発表では、身体間の関係や言語の物質性（発話＝飛沫）といったコロナ禍で顕在化してきたテーマをより広い社会技術的文脈において考察し、今日のコミュニケーション実践に通底する記号イデオロギー (Keane, 2003) を分析していく。特にコミュニケーションの導体 (channel) に関わる交感機能 (the phatic function) に着目し (Jakobson, 1960; cf. Malinowski, 1923), コロナ禍以前から継続して人気を博しているオンライン動画文化である ASMR における接触と情動の分析を足掛かりとして、交感の記号イデオロギーの今日的意義を精査していきたい。

### 2. 導体と交感機能

導体とは、コミュニケーションの出来事において、参加者/物の共生起や接触の開始、持続、切断などに関わる要素のことで、そのような導体の条件や帰結に焦点をあてるような記号過程を、Jakobson (1960) に依拠して、交感機能 (交話機能) という。例えばパンデミックにおける接触をめぐる様々な推奨・忌避行為は導体の管理に関わる交感イデオロギーの発露として理解できる。こうした分析志向はパース記号論の延長線上で展開してきた言語人類学において長らく認識されていたが、ここ十年ほどの研究によってより積極的な前景化が見られるようになった (e.g. Kockelman, 2010; Zuckerman, 2020)。

### 3. 導体の快樂

本発表では上述のような視座に立った上で、特に ASMR などの動画やストーリーミング文化を考察することで、昨今の高度にネットワーク化された世界における交感のイデオロギーを探っていく。ASMR (Autonomous Sensory Meridian Response) とは、例えば、鋏で紙片を切り裂く際の微細な接触音の聴取によって「ゾワッ」とする触覚的な心地よさを感じる、というような共感的な快を提供する動画コンテンツで、2010 年代初頭から現在に至るまで世界的に流行しており、コンテンツ提供者とそのファンの間で無数のオンラインコミュニティが形成されている。本発表では、ASMR 的快 (tingles) とそれを誘引するとされる音/声記号 (triggers) の指標性と、ヘッドフォンやマイクロフォンといった技術的環境に注視して、ASMR が標榜する遠隔の親密性 (Andersen, 2015) と導体の快樂とでも呼べる情動を分析していく。

#### 参考文献

- Andersen, Joceline (2015). Now you've got the shiveries: affect, intimacy, and the ASMR whisper community. *Television & New Media*, 16(8), 683-700.
- Jakobson, Roman (1960). Closing statements: linguistics and poetics. In: Thomas A. Sebeok (Ed), *Styles in Language*. Cambridge: MIT Press, pp.350-377.
- Keane, Webb (2018). On semiotic ideology. *Signs and Society* 6(1), 64-87.
- Kockelman, Paul (2010). Enemies, parasites, and noise: how to take up residence in a system without becoming a term in it. *Journal of Linguistic Anthropology* 20(2), 406-21.
- Malinowski, Bronislaw (1923). The problem of meaning in primitive languages. In: Charles K. Ogden and Ian A. Richards (Eds.), *The meaning of meaning: a study of the influence of language upon thought and of the science of symbolism*. New York: Harcourt, Brace and Company, pp.296-336.
- Zuckerman, Charles H.P. (2020). Phatic, the: communication and communion. In: James Stanlaw (Ed), *The International Encyclopedia of Linguistic Anthropology*. Wiley.

# 遠隔コミュニケーションの遅延はターン交替や同期にどのような影響をもたらすか

細馬宏通(早稲田大学)

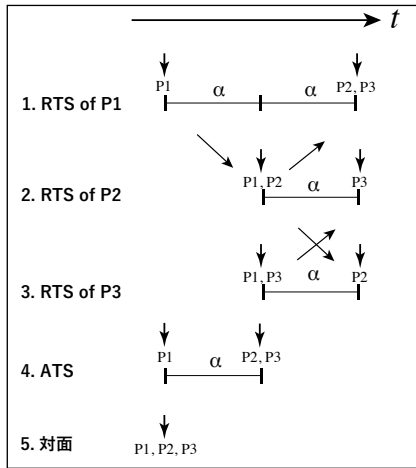


図1：音声・動作の同期のずれ

P1, P2, P3が遠隔コミュニケーションにおいてP1の合図によって同期を試みた場合の各参加者の相対時系列と絶対時系列。対面5ならば全員が同期するような動作でも、レイテンシ $\alpha$ の影響下では、参加者間で異なる相対時系列が体験される(細馬, 村岡 2022)。

自分以外の参加者の行動を通信機器越しにしか観察できないとき(われわれが遠隔コミュニケーションを行うときにこれにあたる)、参加者P1の視点から得られる時系列を、「P1の相対時系列(Relative Time Series: RTS)」と呼ぶ。P1, P2, P3の三者が遠隔コミュニケーションを行う場合を考えよう。参加者間のレイテンシが $\alpha$ であるとき、三者がターンの同期を目指す場合のATS, RTSは図1, 先行話者から次話者にターンが交替する場合のATS, RTSは図2のようになる。いずれの場合も、P1, P2, P3が知覚する発話の前後関係と発話間間隔は、参加者ごとに異なっている(細馬, 村岡 2022)。また、先行話者からみると、次話者の発話開始は、通常に比べて $2\alpha$ だけ遅く感じられ、レイテンシの影響は2倍になる。このため、オンライン・コミュニケーションを分析する際には、それぞれの参加者ごとに映像・音声を記録するか(細馬, 村岡 2022)、参加者のうちの一人の映像・音声をもとに、参加者間のレイテンシを推測し、各参加者の時系列を推測する必要がある(細馬 2022)。

本発表では、これらのモデルをもとに、漫才コンビ「ジャルジャル」が2020年に公開したオンライン漫才『国名わけっこ』の、発話同期場面、ターン交替場面を分析し、レイテンシがコミュニケーションに与える影響を具体的に考察する。

## 参考文献

Hoey, Elliott M. (2020). When conversation lapses: the public accountability of silent copresence. Oxford University Press.  
 細馬宏通 (2022). ママ、この人の名前は何?— ニュース番組のオンライン・インタビューにおける大人と子どもの相互行為. 社会言語科学, 25(1), 55-69.  
 細馬宏通・村岡春規 (2022). 遠隔コミュニケーションの時間的なずれは相互行為分析にどのような影響を与えるか. 社会言語科学, 25(1), 230-237.

## 1. はじめに

コロナ禍を期に一気に広まった Zoom などによる遠隔コミュニケーションでは、しばしば対面会話とは異なる不自然なターン交替の間やオーバーラップが生まれ、参加者間の齟齬の原因となる。高速のネット環境では送受信時の遅延(レイテンシ)は150ms以下と言われており、それは通常の会話の発話間時間長である100-300msec (Hoey, 2020)と同程度であるにもかかわらず、なぜ会話に影響が生じるのだろうか。本発表では、送受信の遅延を伴うターンの同期、交替、オーバーラップにおける発話間長を図解し、全く同じ遅延環境のもとであっても、発話間長は先行話者、次話者、聞き手によってそれぞれ異なる長さで知覚され、そのことが共有されにくいことを示す。

## 2. 遠隔コミュニケーションを考えるための二つの時系列：絶対時系列(ATS)と相対時系列(RTS)

参加者全員を機器なしに同時に俯瞰し、その行動時刻を正確に知る事のできる理想的な視点から見た時系列を、本論では「絶対時系列(Absolute Time Series: ATS)」と呼ぶ。これに対して、参加者P1が自

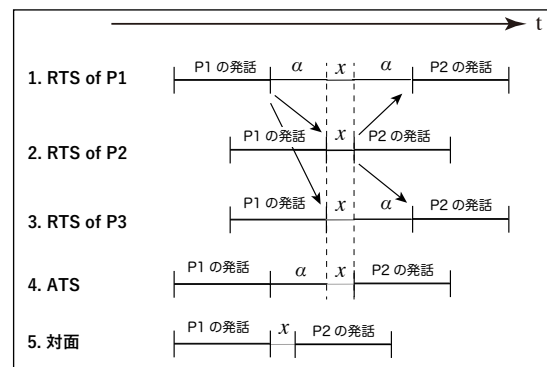


図2：参加者間で認知される発話間沈黙の相違

P1の発話断片終了時からx秒後にP2が次の発話を行った場合の、各参加者の相対時系列。現在の話者(P1)か、次の話者(P2)か、発話を行わない参加者(P3)かによって発話間の沈黙長が異なることに注意(細馬, 村岡 2022)。

# テレプレゼンスの会話分析—遠隔買い物場面の分析を通じて

山崎晶子（東京工科大学）

本発表では、遠隔技術を用いた買い物場面について発表する。

コロナ禍を経て、遠隔会議、遠隔授業、リモートワークなどの遠隔通信技術を用いたコミュニケーションが広まった。また最近では、Chat-GPTのようにAIが急速に発達している。これらのコミュニケーションを可能にしているのは、遠隔技術、エージェント、ロボット、人工知能からなるテレプレゼンス技術である。これらの技術は、私たちのコミュニケーションをどのように変化させるだろうか？

ゼロックス・パロアルト研究所で映像と音声で遠隔地間を結ぶメディアスペース研究がなされていらい、映像と音声で遠隔地を結ぶ研究はコロナ禍以前にも着々とされてきた。テレビシステムを用いていた20世紀の遠隔共同作業における問題は、会話における視線や身体動作などの効力が失われるという発話と「映像」の問題だった。ここでは、聞き手の視線を観察できなさないことや逆にそれによる身体動作の誇張が指摘された。クリスチャン・ヒースとポール・ラフは、このことを「脱身体化」の問題とした(1)。

このように、遠隔コミュニケーションにおいては会話分析においても開発を行う工学者にとっても映像の問題（参与者同士の視線の一致など）が主に取り上げられてきた。

しかし、われわれが近年行った遠隔買い物実験では、映像だけではなく音声、特に音声の出力位置が重要であることが分かった(2)。スマートフォンやカメラ、スピーカーフォンが現地側の買い物客側にあり、遠隔にスマートフォンとカメラに対してそれぞれ一台ずつのディスプレイがあるシステムをわれわれは用いた（発表ではビデオを用いる）。この実験からは音声の出力される位置が、重要であり、この音声の出力位置から作業者は身体を自然に配置することが観察された(2)。

本発表では、この音声の出力位置と相互行為の問題をデータとともに論じる。

## 参考文献

- (1) 山崎敬一・川島理恵・葛岡英明 (2006). エスノメソドロジック的研究をいかに行うか. ヒューマンインタフェース学会誌, 8(4), 223-228.
- (2) 小松由和・山崎晶子・山崎敬一・池田佳子・歌田夢香・久野義徳・小林貴訓・福田悠人 (2019). 遠隔買い物支援における複数視点と音声の位置. 情報処理学会論文誌, 60(1), 157-165.